



此
之
存
信
抄
本
十
三
二



九曜文庫



花鳥餘情第十一

薄雲 ウスクモ

櫓 アサカホ

し女 メトメ

十四 薄雲

心款為卷名又詞云雲けりしとくしとれ
新めい色なるをとあけいと紫とをうや
ちんちんとをりともつふ赤や源氏亦歳
冬より廿一歳うねりその事みくしり
冬よりありゆきまにいたるのともよ井

こはれ大井の里は事也

かろちりき所り思うら録と

二条院の東院をいふ也

しんじつにふしめたるる今もあはれ

紫の君のまじりあはれ事よさう

目もくろくろく志のいれ

姫君の二条戻りしり流り今春日

雪海きと山なるいれをたわがうけし

いれ文もくありまたしと同行いれよ

一ノ本

別々に結するはあはれいれいれいれいれ
いれいれいれいれいれいれいれいれ

よのしほは海女のきよきよきよ

いれいれいれいれいれいれいれいれ

いれいれいれいれいれいれいれ

人あはれいれいれ

人あはれいれいれいれいれいれ

あはれいれいれいれいれいれいれいれ
いれいれいれいれいれいれいれ

いれいれいれいれいれいれいれいれ

いれいれいれいれいれいれいれいれ

いれいれいれいれいれいれいれ

いれいれいれいれいれいれいれいれ

まほけさるるねに木あはれありのうと
紫上との二人もくへるへくは来り
巻りあうき秘しゆやうと石
上のひいどなりこうく福もあを
しとよきねり

御らうあぬりやの物

コメミチ 皇女の御らうやとせりま_{ヤウメイ}と陽の

ミコト 門院ふりの事

ふふるや人あひふぬれまじりあふ事
このこころ

あのこころあの上の御らうあはれ

まことまむとあはれあはれ

あはれあの上の御らうあはれ
いこころ

あはれあの上の御らうあはれ

あはれあの上の御らうあはれ

あはれあの上の御らうあはれ

源氏まじりあはれ

七日の御らうあはれ

正月七日の御らうあはれ

一具こゝろをき日つて物のこゝれは
こゝろをいへ何海に業乃字に秋
とる書也

こゝろをいへ何海に業乃字に秋
とる書也

過ぐ成のれよと成るうぬ
井いあぐさふう又早下あし色不
及あし中庸のこゝろをいへ

ううと海なるううとあ
いれと遠例らあつて

上の事の中をさうな事にはうろとさ
せぬこゝ

六条院の御子あな事とらうい
さうな事

人志進めあしうろあし
人のさうな事とらうい
御申の事

院の西ゆいんうあひくうらた御うし
ろとさうな事

そのお院の御書言にうりて源成也

志乃政ニシノリカトとらり治事と女院の御ミコトらり
日ヒらりニわく思オモひハ一ヒト事コトとほり
りニの治チ事コト

御ミコトの志シ事コトとらり治事と

源氏ゲンジの御ミコト治事チジとらり

え中ナカ治事チジとらり

ん母ハハらりニ後上ゴウジョウ人ヒトがニいハりニあハりニあハりニ

わハりニ

天下テンカ源周ゲンシュウの事コト

よ井イりニあハりニせハりニ

よ井イれニ僧ソウ二ニ間マりニ休ヒとラりニやハりニ御ミコト持テ保ホ

のノ事コトあり

てんテン々ツツ人のノあハりニ治チ

五眼ゴガンのノ一ヒト也ヤ帝テイ杖シヤウ林リン允イン王オウホノ照シヤウ見ケン也ヤ

はハりニのノいハりニあハりニ治チ事コトとらり

らラりニ

一ヒト年ネン三サン人ニンらラりニあハりニ治チ事コトとらり

其ソノのノ事コトとらりニあハりニ治チ事コトとらり

らラりニ

當代トウダイの御ミコトとらりニあハりニ治チ事コトとらり

まじき事し

日のもとにわたりし後しりる所ありきり

陽成院の御母二条后ありナリシ葉平中納

かの后よりついでに中納言伴礒内法

より入るりて陽成院の御門に中將

乃ちついでに中納言の御門に中將

一はついでに中納言の御門に中將

雲の女院の御母に中納言の御門に中將

思ふに

いんりの院りの御門の

花ちりまじき

あはれにわたりし葉をせはく

これにわたりし御母の御門に中將

まじき事しとわたりし御門に中將

中納言の御門に中將の御門に中將

いんりの車にわたりし御母の御門に中將

高蓋よりかきし御母

わたりし葉を秋の御門に中將

松道 長ついでに御母の御門に中將

まじき事しとわたりし御母の御門に中將

六條御^{ミヤストコロ}景所^{ミヤトコロ}くはあつる事始あはれそり

くの始なり

志のいひまきありくもなること

秋のゆめはまのいひまきなりくもあはれ

そちの言ひある事なりくもあはれ

くはあつる事なりくもあはれ

くはあつる事なり

白くもあつる事なり

源氏の志のいひまき事なり^{ミヤトコロ}と自辨

くはあつる事なり

わあつる事なり

源氏の志のいひまき事なり

くはあつる事なり

くはあつる事なり

秋のゆめはまのいひまき事なり

くはあつる事なり

おらあつる事なり

藤壺の女御の御事なり

思届りたる事なり

わあつる事なり

このみらしうし海屋とくふんさ法

これいぬいり非君のあついなをぬきまふ

るれ

つ録より意とわりの利きね

源氏のいよく申まを御みれこく

志のふたれ

乃御ぬちわはしくしんと思こき

はうしきこいしんかんと君乃御

うろくともあはゆえちと思んあうり世

上うりうりねや

あふんまがしんちがたまはるしん

次戸あしそくういりわ火がくしみれ

きりふ事とらう

候うぬとら思成る録をねらうし火式新いさるり

^身 ^{カキ} 舞火の歌とあふんはひきあはれちあふんあ

今葉下のひいなるねく下りしゆ

とよけのさくしんあ火のえれら

まうぬんうらう下れ思うらうれあ

さくさあふんや

あはらき物とをうらうらうら

源氏の志れぬとてしる物とありしれむ
のうもたふえ

あつし事しに御心いせり
さの御たりやと御念佛しあふ
ほをふれいふ井とてさけい
さふさり又女志い思ふ
乃行つるあり

十五 榎

初年 綱力事名源氏す一歳の事
高雲の志はとて同也

斎院御つとそあり井治い
あさかろ斎院ササキ桃園式ミンソクノキキガ乃御女
株のあり賀茂のしりさよさけ
しるの巻し又まの心服ウケあり
母院とありありあり

こわりのま
あつひろりの母このま枕うのま

ハ女其るりこをのるるるの

おろろおねあつてもやうもそくひぬもふお
あつてあつてしつて

る留給あつて或部心の変れりて母院
を源氏りあつてをそつてしつて思よ
つと給つてしつてとつてあつてせんせら
給つてしつてしつてしつてしつてしつて

まふるが

あひまのるるりくろり御本下はあつてけ

^{フク}昭^カ志^カの^カ本^カの^カ西^カ麓^カを^カり^カも^カり^カし^カに^カと

あひつろのぬのともらわらせらるる本
下と本下のみら給なりしつて
まきあつてんがしつてしつてしつて
しつてあつて

給つてしつてしつてしつて

いしつてしつてしつてしつてしつて
いしつてしつてしつてしつてしつて
も給つてしつてしつてしつてしつて
しつてしつてしつてしつてしつて

あつてしつてしつてしつてしつて

みづきと糸にうねるらん

あまのこゝろにうねる糸のうねる

と葉ありのよの飛ぶよの風の風

あまのこゝろにうねるらん

のみづきと糸をひたすあやらん

うねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

あまのこゝろにうねるらん

侍りなむ

いふれと来とてり

ふらちりあつちりも思ふ

とふあふちり花とふ思ふ

ふと下つ詞もあふ思ふ

ふとこの思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

あつちりあつちり思ふ

二条院の東の對せん一母院の宣こ

旨こや

にありしとらりしもの行ふ

あさひの母院の海成のまゝ
留のあひしとらりしもの
事そとあはれもの

う縁も事なほらるるれと
あさひのあはれもの

冬月トキの秋アキのまじりしもの

涼スズメ宮ミヤの十一月の神カミ徳トクを

停トモ心ココロを

あひしとらりしもの

源氏乃君ヒコ涼スズメ宮ミヤの

なまはれ

うまはれ

世セ俗ゾクのまじりしもの

にありし

いふ

あさひの母院の海成のまゝ
留のあひしとらりしもの
事そとあはれもの

身とるを境まらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

凍内なるのけれまら母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

人のふりまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

斎院まらみらう母とあやとくたな

あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな
あやとくたなまらみらう母とあやとくたな

うきもあはれはるる思ふもあはれ
物語りのいふいふもあはれ

むかしはるる

母院の女房達いふくくあはれ
いふいふもあはれ

はるるあはれはるるあはれはるる
あはれ

はるるはるるあはれはるる
はるるあはれ

はるるあはれはるるあはれ

はるる

はるるあはれはるるあはれ
はるるあはれはるるあはれ

はるるあはれ

はるるあはれ

はるるあはれ

はるるあはれ

はるるあはれ

はるるあはれ

はるる

清少納言（清少納言）の御成（御成）の御時（御時）の御今（御今）を
御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）

ち（ち）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
童（童）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
物（物）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）

ひ（ひ）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
〜

この中（中）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
あ（あ）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
後（後）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
ら（ら）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
ま（ま）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
あ（あ）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）
は（は）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）の御成（御成）

清くこの新しき

いんりの後よりあつむ

美ちるまじり事

意まじり人のあ影

清く女院の御まじり

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

まじり事

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

あつむいんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

いんりの清くまじりなる

十六 しか

心秋亦詞を巻右源氏悉す二景の
三月より廿四の十日までの事一此巻
よりみえあり

うらうらあまれば御しうくもた

三年の三月ウスクミ落中女院うらうらと

一の三月ヒシキ月園うらうらあま

世中色あなまうらうらあまの程

天下のみか豫園リヤラマシの賑とあまあまじりた

まかうらうらあまのカライ文衣のうらうらあま

あふや

あふやのあふやらららららら

四月ヨリ清和ヨシのころ

あふやのあふや

源氏の源氏のころ

あふやのあふやのころ

後の源氏のころ

あふやのあふや

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふやのころ

あふやのあふや

あふやのあふや

あふやのあふやのころ

あふやのあふや

あふやのあふやのころ

菫の居つとも思ふにや
しありて 深股チコフダ — 結ぶにや
古今の款

あまのつらみのあまの
とつらみ業とて

ふまのつらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ

つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ

つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ

つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ

つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ
つらみとてえんそ

うづらとあかしの村

うづらとあかしの村

あさかほの事

あさかほの事
学生ガクセイ入学ニシラカクの時文章院モウジヤウインの堂タウ監ケンの字カキ

たは名簿ナマボにあさかほとせ聖廟セイバウの四字ヨナシ

い管カシ三サシ善清行ゼンセイカウにあさかほに耀ヨウとせ

夕セキ音オン乃ノあさかほを源ゲンふとあさかほ

とあはほいしあさかほを源ゲンふとあさかほ

あさかほの事

今イマもあさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

あさかほの事

おぢえんらとつて

わらわひらひらひら

わらわらとらとらふら花乃笑サシをとも

こゝろあつとつて

あらえんあふがけ

業らえんらとらふらとら

おとあえれらとらあふがけ

しゆらとらとら

あされとあされら大急サシをとも

おとまらとらサシ假サシ糖サシをとも

らと一やけらとらとらとら

物サシ糖サシをともとらとらとら

産らとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとら

とらとらとら

とらとらとら

とらとらとら

とらとらとらとらとらとら

とらとらとら

翰林カクシの人出野シツノとて韻リツの字切韻セツリツとて
何字ナニノジとて韻リツとてとて又韻リツ
中よ取韻トクリツとてひく題チのみ文字モトの中
平聲ヘイセイの字とて韻リツとて又韻リツ
又何韻イタヒナニツとて作者サカシの心ココロより始ハジに
とて事コトとてある也

まことつねとてしつひ枝エダの音ネとて始ハジに
車クルマ亂ラン孫康ソンカンの家イヘ貪ヒしてあつた事コトは
堂ドウ音ネとあつた事コトは氏の意イのつとせ
の榮エイ意イとて事コトとて始ハジに

て力チカラとて事コトとて始ハジに
事コト也枝エダの音ネとて意イのつとせ
とて何ナニとて事コトとて始ハジに
事コトとて事コトとて始ハジに
事コトとて事コトとて始ハジに
事コトとて事コトとて始ハジに

今日ケフ凡マン学生ガクシ在ア学ガク各カク以テ長チヤウ幼ユウ為シ序シヨ初ハツ
らつた事コトとて始ハジに

才の人と文章生ミナコトは補ニとこれと進ニ去ニ
ととニり或ハ沛ニ前ニと勅ニ進ニとと
らまニと法ニらゆニ幸ニありニ文章生ニに
補ニしてのらニりニ方略ニの宮ニらニ成ニ業ニ
課ニ法ニととニらニ幸ニとありニととニらニ方ニ略ニの宮ニ
時ニ務ニ業ニありニととニらニ方ニ略ニの宮ニ
旨ニと家ニらニ方ニ略ニの法ニ文章生ニ
乃ニ方略ニととニらニ方ニ略ニの法ニ業ニととニらニ方ニ略ニ
職ニの時ニと又ニ外國ニの掾ニありニととニらニ方ニ略ニ
散ニ位ニの時ニととニらニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
のらニりニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
らニりニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
ありニととニらニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
試ニりニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
の悉ニしニ方ニ略ニの宮ニととニらニ方ニ略ニ
次ニ中ニ御ニ前ニ試ニ時ニととニらニ方ニ略ニ
給ニくニ進ニととニらニ方ニ略ニ
りニ任ニりニ方ニ略ニ

るせのふさふさ
ふさふさふさふさ

子のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
くま

子のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
ゆふやあやのよりのあやのそらうらうらとくし
源氏のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし

とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
のあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし

察試の目とつゆ

とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
察試の目とつゆ
とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし
とくしのあはれおのちのあやのそらうらうらとくし

史記五條の中三條以上は海

擬文章生り補じりや

源氏のうちをきりきり記しありけりんす

よふゆりきり

藤つゆの中をわらふ事女御の中

えりゆりけり事と源氏の打け

きこつゆりあつて源の姓とを

まつゆりとも帝王親との御女とみ

源氏しりやせんゆりゆりゆり石れ

申絶り事し

おとをぬち居りありけり

内大臣持大政大臣例忠義公兼通天

延二年二月任大政大臣 元内大臣祖

こと通りゆり連綿たり信長公清盤公

かへり大臣より相國よ任じりや

いんちりきりいけり

掩韻よまふ事ゆり神の事しりあり

一変るあり

いんちりきり

後仕の御子の御女一人弘徽殿の御女

御母に二条太政大臣の御女一人を

言^{クミ}升^ルるこの母君しんをさうりありふ
梅^{アサヒ}窓^{マド}大^{オホ}細^{ホソ}まの心^{ココロ}方^{カタ}し

をのし十^{ジュウ}より後^{ノチ}のち

おしーらるるくッダ音^ネの志^シー

十二^{ジュウニ}歳^{サイ}し

るふのみさうたの源^{ゲン}氏^シ

世^{セゾク}俗^{ゾク}りるにらなむあやとひみ
詞^{コト}の字^ジり別^{ワケ}と音^ネとひみ
しるやうのあつたしと何^{ナニ}と又^{マタ}
けくふのふさうたの源^{ゲン}氏^シ

らうらうらうにせううよぶとせうらうら

しんや

らうらうらうにせううよぶとせうらうら

あがまがしんをぬらんとらうらうら

あしーのまし

あしーのまし

弁^{ヘン}文^{ブン}女^メ師^シの中^{ナカ}文^{ブン}よめら後^{ノチ}ふ事^{コト}也^ヤ

しんや

雲^{クモ}井^イの鷹^{トウ}事^{コト}し

しんや

あゝの非忘れ事こひの美や物名
まのこ

おひとと絲のま

この物もいひつらうとさあぬん

こゝのよとあしとあやしく物あはれな

ゆづるか

雍門周ヨウモンシウの琴コトを弾ヒキとつらうと古コの和ワと

とひとまゝなり琴の終ハヤシあしと

まゝかまゝのまゝとあしと

のうぬと上ウヘつひと何ナニのちと

うよつと真マコト士の賦シのうと思オモふ

あつとつらう物モノとつらう

あしと

ら

あつとつらう物モノとつらう

あつとつらう物モノとつらう

あつとつらう物モノとつらう

あつとつらう物モノとつらう

あつとつらう物モノとつらう

あつとつらう物モノとつらう

しらの時^{イフ}も痛^{イフ}からぬらあはれや

さうし^三准^三していづらや

さうし^三かきりやあはれや

むくもんやうきあはれ^三の志の本

きの^三かきり^三 備馬示 今業冠老の志

あさきの色^三あはれ^三あはれ^三あはれ^三

あはれ^三あはれ^三あはれ^三あはれ^三

あはれ^三あはれ^三あはれ^三

大よのそやうの御あはれ

故大敵の御^チ仕^シの表^ラとしてうり所

事^三あはれ

あはれ^三あはれ^三あはれ^三

折^三あはれ^三あはれ^三

あはれ^三

あはれ^三あはれ^三

あはれ^三あはれ^三あはれ^三

あはれ^三

源氏の志^三

あはれ^三あはれ^三あはれ^三

あはれ^三

夕暮の意の内の大ぬれしころが
いづれかふとく

すこしきかきしきとせしむる光
いづれかふとく

渚のしきとせしむる光

よきとせしむる光
のゆかり

大油のしきとせしむる光

梅窓大油のしきとせしむる光
た人のしきとせしむる光

女流のしきとせしむる光

いづれかふとく
てしきとせしむる光

いづれかふとく
いづれかふとく

いづれかふとく
のゆかり

いづれかふとく
いづれかふとく

いづれかふとく
の意の中

らくもあまのこあがせまふとふいふ
いふ

これより上臣殿のふと思給ふ事
十回ありまじなりける

お井のねと十は歳とク音あり二
まより給なり

りてあまの物なりとて六位とてあま
とほふ

いふと位なりあるにりて六位とい
ふ練と位なりと上とてなり

とせまぬの契とて

あまの物なりとてあまの物なりとて
いふうちの中の内冠者の意のあ

いふなりとて給なりとていふなり
つねに

いふなりとていふなりとていふなり
謙周よりいふなりとていふなり

いふなりとていふなりとていふなり
いふなりとていふなりとていふなり

いふなりとていふなりとていふなり

ふひくたあしくいあつへんく

五節セチの舞マイ妓ヒメやそカツアま仕マシりリりリとち

らまマりリまマ善セシ相シ公コウの意イ見ミホホりリみ

えエりリ

うウりリとトて

苦ク痛ウチ也

うウ魚イサの御ミりリ

しシらラまマの御ミりリ也

あアちチあアはハいイまマの娘メのメ今イマもモわワらラんンとトまマりリとトまマりリ

こコよヨなナらラしシらラ天テン照シャウ太タイ神ジンとトやヤ也

うウきキひヒらラ

そソらラらラとト

みミせセらラのノまマつツりリとト也

十一月イカノケモノヒ中ナカ七シチ日ニチ舞マシ妓ヒメ糸イト入イリ 或アル晚エン茶チヤ 則スナハチ有アリ

帳チヤウ基キおオ御ミ宣ノリ目メ清シヨウ前ゼン試シ外ゲ日ニチ童ドウ女メ
御ミ覧ラン辰チン目メ節セツ會エ舞マシ妓ヒメ進シン舞マシ

うウりリ

物モノ々々一イチきキらラとト又マタ有アル祝イハヒ也

しシ女メのノ神カミいイぬヌりリあアらラ袖スベテあアらラのノもモまマらラひヒつツまマらラ
をオしシらラみミとト神カミいイぬヌりリいイひヒんンいイびビうウりリとト也

神事とく解除カイヤ五節セウの難ナニ故イり候

のまへに候り思ふ候り候り

みまのまへに候り思ふ候り候り

六位の人をより候り候り候り

あり候り

かの今をより候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

このに候り候り候り候り

花菱のより候り候り候り

あり候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り

いとふりてはなはるきる御しらの

美らるる事し

せら志の目内はしききとりにてじし
のふりし事えく

内つしきとるあ成るとり

た馬寮のびつ下借をさる来しき

とつしきとるあ成るとり

と事うへらりしあこのかゝの時

例しに程事えへらりしきり例

はまよとくも

きこうの女のあまのれわと朱雀院より

幸あり

非父子之時行幸上皇宮例

天長十一年正月二日仁明天皇幸淳和

院見西使天慶十年正月四日村上天皇

幸朱雀院但母后御同宿謁太后下相

殿見李部王記其後度々幸此所

抑龜山院御宇文永八年丑月行幸後

深草院御所長誦堂之時有沙路為

中門下御如朝觀行幸被上天長木

例レイ々ク

みかあをまうりゆくさねとききりふ御門あ
り庭の御そそまつりさうむらさきりあ利
てりり結あけりあうさ末まへれり

内宴ナチニ目主上ニ并ニ才一公卿タケイチノノキヤウチヤクシヨウアカイロウ着赤色チニヤシ又殿上
賭ウミ牙時トチ如カク此コノ見西宮抄ミニノウキヌミタカサメ青色袍アヲイロノウキヌミタカサメ下カサメ籠カサメ

極キョクりさの或チハ朽葉チハと急用チヤクヨウとさ

まふゆこのんみふいとあさうてゆい
い結ふ

西前ヒシノミロビ儀キヨウクタイは勅チヨク詔ミコトノリと結ヒトふヒト延長エニチヤウツウツ應和オウワ保木ホキ

此例レチ也又堀河院ホリカハノイニ寛治四年タニチ鳥羽トハトノ殿テン行幸ギョウキョウ
り被下キヨクタイマアリ勅詔チヨクミコトノリ有進士ヒシニマロビ試シ

はかああまうりてい節セツにさあれゆき

敬崎キョウサキの徒チりニ結ヒトふヒトと今イマ高量シヤウリヤクすスふ

とさうかあやせそせいとさへうけり
とさう

院の御門ミカドもささりササリの事コトとさそんやま

院の御門ミカドにさうりつがの御門ミカド也

當タテマれ昔コト成ナリさうさサウゆりユリにまつも花ハナのまやあやさう

ま上の御ミカド製セイさうさサウゆりユリのさのあせたる

花鳥餘情第十二

玉鬢

十七 玉鬢

け巻いし女のあよみかたをたぐくしふ糸院
 廿五歳の三付より十二ねまゝくのま
 とどろこおほよそとほろろくまめ條と
 うりやくちん一のきりわひそら
 むふりの地と物のまをりうらむ
 じまのまらうゆうのまをみかみ
 十八源氏の十六の時りまらやまれ
 うりささうり チ枝仕のまのまを

とついで時りあひ給くまうらうま
としままけゆるこのいぢ志の口志とし
あつる系年やうりゆりうちの氷
の如く大宰が武りなりくらの
アツク具ちる社と肥前固あ
てサとせしうりともいゆり肥
ほの虫いしちまのるむとくあつと
とのあつらうこれあ志を思もく
うらうまやうまふりしうい
あつらうのともあをういして系うも

のありし時りせりて志道の志
ゆきあひくまれりてら系院へ
ひらり社給ひしとまうらう志
に女これしうりあつるアツタが
のうらうまいせりゆりすてるやうり
給つる系院の上い女七八とこの巻り
みまれしとぬしと女はなうらうま
うらうまこのしと然らうりく毫
の志しゆり

うらうまうらうまあつらうりタ

不露の思ひし結んば

おろくの思ひに其の母のたまふの思ひに

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

この御殿よりけり

し廿の巻の終りあはます

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

少戴の女御御許兵部君あはます

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

おろの思ひに結んば

新くいふらきんらあし

あにいの院あくゆふふのうらうと

新川ふ町いああなしてリヤウ霊か

あうらうらう春りみらうらうのあけ

さぬちれとのあうもろけけあな

あうふらうもらあうらうの

ゆうじんくうさうくわらうくせん

よらうとや

あうあしうらうらうらう

あうらのあいのうらうらう

少武のいみけ年とつれんこのあし

うらの時や

うのあいのけいを

あやのあ養ヤウヤウとらふん

まうのあし

あうらう

あひあうらうらうあうらう

あうらうらうらうあうらう人あうら

あうらう

あうらうらうらうらうらう

はらひもたせむはらひもたせむと人へかゝるなり

とやつらうい田イナサカ今の初也といふものあり

てもあふふたしよまし世ヨソ信りしうき

くひのいしうあふ事と人へかゝるなり

多人あふやうの助タスケ也

まゝにたつらうなり

不ホシ妻り且しはらんとしふん

えよとんたつ松浦ニツラノあうのいしをひてちりん

肥前ニツラノ國松浦明神と太宰タガヤノ少貳藤原

廣ヒロシ継ツギの靈リヤウと入イリる山ヤマの神カミ功ツク皇ミコ右ミダリの山

鏡カミ化カ一ヒト石イシと名ナをうとて山ヤマとつり

いしをひて松浦ニツラノの神カミとつりへ来キたりや下シれ

詞コトり松浦ニツラノとこゝた回マヒやうあり

つらうつあてい石清水八幡トウラタテと同トナリ祈イノ

つらうつあてい石清水八幡トウラタテと同トナリ祈イノ

二の波ニノナミあり来キたりし

あはれり志ココロあり福フク也

我ワレももつらうなり

大吏タイシ監カンいふんイフンとつらうなり

とまはるるさひさめし唐泊も備前国よ

わが 徒衣守

るりほひをなほら泊りまはる人りのあ

このらのせつとまじあまをそくけいす

しつうを

豊後今よりりことをりて事と思

このあを誦しあつこ

いふきつりぬ

都へ入るるあ

そま水もてくろりぬとくうらして

舊説よ莊子の魚のそまといけりこに

いふかろす一説列しきろく

まうもこくたれあやろあ

高誘まは執前固りあり

うまえれぬ

村上仰記云康保二年八月廿八日茶師

寺三徑土師木相宇奈森外

かたけの師中あろろをせん

長谷寺の観音の佛とて神よ射て

神のついであろろとあれぬ

みの町より舟りひららららとせきく川

末流より

小右記正暦九年九月八日ニケル奉長谷ハセ寺テラミ

午時ムナトキ至椿市ツバキ令交易キタヤク御明灯ミアカヒトウジ心器ココロ木

奉御堂ミヤウラ修シユ誦ソウ誦ソウ布フ女メ端御タテミ明アカヒ三万灯

と奉りてまゝつる人ヒトいりてつる

いりてぬゆありの奉りて用ヨウ意イ

と奉りてこの物モノ諸シヨの心ココロ小聖コウセイ文モンの右ミダヒ符フ

の記キとありてふハ判ハ

をんるありてつる人ヒトいりてつる

ありてつる人ヒトいりてつる少武コウブの後室コウシツ兵ヘイ

予ヨ悉シツころし人ヒト

見ありて奉りてつる人ヒトいりてつる

りて

李リ部ホウ王ワウ記キ延エン長チヤウ八ハチ年ネン八ハチ月ゲツ作サシ願ガン文モン遙ヤウ

祈イノリ長谷ハセ寺テラミ奉テラフ灯トウ明ミヤク十ジウ万マン灯トウ

小右記コウジキ云イハレ正暦セイリキ三年サンネン三サン月ゲツ奉テラフ長谷ハセ寺テラミ奉テラフ

淨明ジヨウメイ十ジウ万マン灯トウき

とありてのつる人ヒトいりてつる

まうんとつるあり

わとめしりちせしとくれより
年律り人を御しり業れらあ
此の御しきそしりしをい
ぬらけ

かいらきあひく

かいらきあひく

今にあしりあひく
あしりあひく

しりあひく

しりあひく

しりあひく

ものいぬりのきり

右近のきりのきり

無きたといひ

寛平御死云臣家有兵者大者

今案首れひやあなとも昭宣公の

つるけ人の名をこの物語り兵藤大

いそなふり幸に右近りみし時

この人といひあつたなどいしと思

あつた

うきうきしておぼえどもをゆる

と来りあつてつゝも初

わあひひらひ移りり来りあつて

掻練カキネリいふとさくら井はきめの移り

わあひひらひ移りり来りあつて

わあひひらひ移りり来りあつて

色一は海の小移りり来りあつて

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

右との志初見あつあつあつあつ

あひ人たあつあつあつあつあつあつ

あひ人たあつあつあつあつあつあつ

かのう人たあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

三人あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

とくはくしうもあま物よりり枕草子
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす
とくはくしうもあま物よりりひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす
とくはくしうもあま物よりりひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす

この心——いひよらぬや

はらうしういひよらぬや
のあま物よりりひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす

中ねあまのひるのこ

中ねあまのひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす
とくはくしうもあま物よりりひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす

あまの心をひるのこ

あまの心をひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす
とくはくしうもあま物よりりひるのこ
うき世しのひる今^{タイ}がしとおれし
さしはしはひるしういひもかんえす

百鍊鏡

百鍊鏡
照掌内百王理乱懸心中

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

麻らうわかまよひ秋葉は養養は命のみと云れ

今葉あかまよひたるも阿かしかうり物

あのみひうとつよふち居るまよひ

ていさうしうり新中てきせしうり

らんご条の右をよとつて観

乙水の御ての観世音寺

八幡り射して松浦のまよひとつひ長

音ちり射あまののちて観音ち

とどかゆらりのけりらるゝしれ

きりあはるゝ

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

しつ葉あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

あまのまよひのち居らるゝと云りしゆ

李部王記延長八年八月作願文遙祈長

谷寺観音願浄病平愈將造白檀観音

像及奉鏡一面灯明十万灯

像及奉鏡一面灯明十万灯

今案又清門定喜チシカトの清エシギの白ミヤトの巡ゴナウの時清

事あり

おほいぬぬきまきしひちし

これなりにお近、おろし

殿のくろひ

業の上

むちまは清り

あーの姫君

系乃まきしりやえまのま

くらつたの中まきし右近のま

けりま

Documentary

魚

ゆいさありわかいさるま

あーのひちまきし八景

うむの御さるに様いれりありあひ

ん

けりま

おろしひねつりまきし

ほむのじりまのくま

物

今案又清門定喜テシカト帝ミカドの西ミナトの町マチは清

事コトの利トク

おほいぬまきまきしらいを

これより右近、かろし

殿テンのくろく

業ノの上ウヘ

むらきし清シヨウ

あーの非ヒ君キミ

系ケイ乃ノきさキいイろロやヤえエまマのノまマいイ

うらつたの中

右近ミナトのノまマいイ

けり事コトあアはハえエのノまマいイ

魚イサ

ゆいさありあかいたるを

あーのひらき

うむの清シヨウくらクラにニ程ハジメくらクラあアひヒ

んンとトんン

けり事コトあアはハえエのノまマいイ

おーあひぬヒつツくクもモきキはハがガまマいイ

清シヨウのノまマいイのノまマいイ

物モノ

ゆかりのいよのころの結つらひ

結申ニカラシクシが裁ちの任固ニシコクくまひじりん

ていさうつゝあはれいよまらびにまよひ

ふよまらびのいよ

初原の事いよなむいよなむいよなむいよ

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

古今奇

古原の事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

川原の事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事

かちいさし

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

いよの事いよの事いよの事いよの事

かちいさし

こころみかへの清り

こころみかへの清り
の清りなれど心はわづらひ
うらやまをこころみかへ

右道こころみかへの清り
らあやめ

あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ

申宮のあやめあやめ

申宮のあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ

あやめあやめあやめあやめ

あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ

あやめあやめあやめあやめ

あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ
あやめあやめあやめあやめ

さうし来^{るか}に連^つぎにわづらひて
いふはくわうりやあつてあつて
うわなをうたはしむる
えさうり給^まふ

いぢかむうのせ

市^{イナ}女^メあひまのるもみり

日^ヒ保^ホとあつてあつてあつてあつて
と葉^ハの^ノ世^セもあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

いぢかむうのせ

あつてあつてあつてあつてあつて

花^ハ教^{キョウ}里^リの東^{トウ}のあ

住^ジ行^{キョウ}

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

申^シ將^{ショウ}を^をま^まま^まま^ま

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

あまのつとむ

夕きり此申ぬも御しわがさしひと
思給くううありさうひとさふさふなる
人おろしく思ひあり
んろ。さういへる御し御し
つうくそつ交せ
おやうく

あやの源氏乃志くくの中ぬ志く
のあんのさしけさひ
いさうの氣調こ一ぢいさふさふけ
いさあわけ

ふこらけさありぬ

豊後外も西のむろ志の業あり
いさう

おれさうみさういさうさうりさう

ひくおれ

貞觀政要唐太宗嘗謂侍臣曰以銅為鏡
可以正衣冠以古為鏡可以知貞替以
人為鏡可以明得失朕常保此三鏡以
防已過今魏徵但逝遂亡一鏡矣
と案人さし後さういさう魏徵あり

あはれ田つづきのきんぎょりはくあまはれ
こたよあひわあめりりこまいねり
あまの御い

海賊カライツ大かみりりや貝やあまり
こら文しりりあまあなわあひわ
あめなりりねいねりこらお井
のいねり

くろあわきよふこのねりはうあま
わのさいりりそまもねり

山吹ヤマフキの向折マクサ葉ハうらまい

ふろくまあやのねりあまはれ
こらねりむうれきりりあひい
ねり

人にあわうりそあまあま
こたよあひわのねりあまはれ
色りいりりなまらひ

葉上のねり思折オモサとせりりり
こら

このねりねりりあまあま

源氏のねりりあまはれお中

ありふらまきりんのをりおよこにうらま
とらふ袖るやとにいとこいふし
ありその母有らうし袖そそしりま
祇いもたな利こい業らららゆい
り也あつてふらうしちり世れを
ちあふい有らう袖るはとせうい
いさうり何海しこいのしすれ
とらあやまむらとえちら

空輝のあききりあはしいろをりも
いんふああふとらり業はとらま
くらあし御ゆるしつらなるうし

あはしひいあふのきうあくられ
うられまむも危きりたりとらま
らうこら御しうとたわらとら
られら又ゆるし起いらは井ら
しとく出家の人とらこのまわら
らわら例あはせ何海と若らゆし
文とのとらたらとあしとらも若ら
らららうとらとらゆらうらうし
とらら(うら)

未つじは巻よありこれ悉くはぬゆいへわ
とくしよとくしのこもぬゆい

ゆい井もつとぬこもしうい

河海り流とかせる中もまひうと文
字とまらう流あわしゆり下の羽りわ
た人のとくぬゆいこもつて葉ゆい
こもしよとくぬゆい井もつとぬゆい
るし

あゝ人のこもぬゆいこもつとぬゆい
ちよぬゆい

ちよぬゆいとくぬゆいのちよぬゆい
或い井もつとぬゆい

ちよぬゆいのちよぬゆい

ちよぬゆいとくぬゆいのちよぬゆい
結同は師と立代集のちよぬゆい

ちよぬゆいのちよぬゆい
のちよぬゆい

常法ヒタチのちよぬゆい
ちよぬゆい
ちよぬゆい
紙カミ

いづれ

ふらんといふもさよふまのよるに思ふも
まつじのふりありてんはほむらひ
つら柳のまのよ中しあはれ
るまよつとんとよきつらうの
すくらひ初とりあはれあはれ
いせやあまはるまのあはれ
とあはれにまつじのふりあはれ
ふりあはれあはれあはれあはれ

よふらうりあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written on aged paper. The text is oriented vertically on the right page of an open book. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink. The text appears to be organized into several columns or lines, possibly representing a ledger or a list of items. The paper shows signs of age, including yellowing and some minor staining.



